

元気が出る“場”の創造

副会長 津田俊隆



本学会が関連している産業領域の閉そく感が叫ばれて久しい。それを反映してか、かつては花形技術領域として多くの若い人たちを引き付けていたものが次第に輝きを放たなくなっており、研究や技術開発の後継者を集めるのが難しくなっている。この分野が多くの産業の基盤を担っていることを考えると、今の状況は日本の将来構想にとっても大きな問題である。若い人たちに向けて働き掛ける面については、学会としても子供科学技術教室の開催、各種の学生会活動実施により、科学技術への興味を増進、若い研究者に元気に活躍して頂く機会を増やそうとしており、これらの活動は学生員の増加に見られるように、一定の効果を上げていると思う。一方、産業界の元気回復については問題が非常に複雑であり、学会でできることが限られることは認識している。それでも何か貢献できることはないか、それを考えて少しでも実践したいというのが、私が副会長に立候補したときの想いであったし、就任以来持ち続けている想いである。

今、方策の一つとして考えているのが、産業界で活躍している会員が喜んで参加してもらえるような新たな“場”の創造である。その理由は、今元気な Web.2.0 を考えると、その本質の一つは各個人が自己表現をする、企業が成果物をより広く適用できる、また有効な情報を簡単に入手できる“場”を提供し、それを多くの人が喜んで活用していることだと考えられ、したがってこの例に見られるように、目的にかなった“場”を提供することが元気を醸成する有効な手段と考えるからである。

本学会は、従来から魅力的な“場”を提供しており、新技術の創造・磨きをかける、組織を超えた人的ネットワークを作る、発表による自己表現を行う、あるいは委員として組織運営を学ぶ機会を提供している。各種のジャーナル、研究会、大会は代表的な“場”としてとらえられる。しかしながら、時代の変遷とともに“場”の形も変わっている。卑近な例として私の周りの地域の“場”について言えば、子供のころの主役であった井戸端や銭湯がほとんどなくなり、その代わりに最近では犬の散歩道が重要な“場”の一つになっている。本学会も、そろそろ新しい“場”、特に産業界を少しでも元気にするのに役立つ“場”を作っていくことを考えるべきではないか。

一つの切り口として、国際化の推進がある。学会もアジアを中心に国際化を図っているし、産業界も国際化は必須として様々な取組みが行われている。この共通の目的を持った活動をうまく合わせていくことができないだろうか。例えば、本学会が開催する国際学会に企業の国際化に貢献できやすくなるような要素を加えて、一つの“場”として提供する、あるいは国際標準化に向けた“場”作りにより一層積極的に関与する等が考えられる。特に後者については国レベルでも強化が図られる機運があり、今年3月の本学会総合大会でも特別セッションを組んだ。多くの人の参加を得て、熱心な議論が行われたと聞いており、関心の高さが伺える。標準化は新しく技術を開発する、あるいは開発した技術の価値を高める面を持っており、企業にとってもメリットが大きく、また技術を醸成する本学会にとっても最も貢献できる分野だと思える。

このような観点から見てみると、本学会は関連産業分野を元気付けるためにもっと貢献できる可能性を持っている。大切なことは、これらの“場”を会員の皆様に積極的に活用して頂くことである。学会の“場”は前述したような様々な活用方法があり、もっと有効に使って頂きたい。それにより、学会も活性化されるし、またこの分野で活躍する人の元気も増進されるという、ポジティブフィードバックが働く可能性もある。これから残された1年の任期、会員の皆様と協力しながら、新しい“場”を創り出し提供する、既存の“場”を活性化したいと思う次第である。